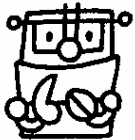


物が燃えるのに、なぜ空気が必要なの

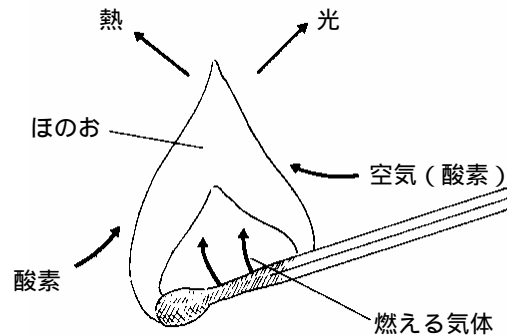


物が燃えるのは、熱で物から出てきた気体が、空気中の酸素と結びつき、熱や光を出すことだからさ。

木や紙に火をつけると、ほのおを出して燃えます。火で熱せられて、木や紙の成分から気体が出てきて、燃えているのがほのおです。

ほのおでは、燃える気体と空気中の酸素が結びつき、たくさんの熱や光を出しています。この熱で、木や紙から出た気体が、燃え続けるのです。

このように、酸素には、物を燃やすはたらきがあるのです。



<物が燃えるしくみ>

酸素がたくさんあるほど、物はよく燃える

もし、酸素(空気)がほのおのところに送られてこないと、燃える気体があっても結びつく酸素がなくて、物は燃え続けることができません。そのため、火は消えてしまいます。酸素がたくさんあるほど、物はよく燃えます。たき火などで、火が消えそうになったとき、ふうふうふいたり、風を送ると、火のいきおいが強くなるのは、燃えているところに酸素がたくさん送られてくるからです。

物が燃えると出てくる二酸化炭素や水蒸気すいじょうきは、燃える気体と酸素が、結びついてできたものです。